

## 研究余録

## シンポジウム『舞姫』をめぐって」補説

◎「一頁分の余白ができたので、昭和57年11月6日、松蔭女子学院大学において開催された、日本近代文学会関西支部秋季大会シンポジウム『舞姫』をめぐって」において発表した問題提起で、時間不足のためなど言及できなかった点を、ここで補っておきたい。このシンポジウムは、文字起こしの上、『国文学 解釈と鑑賞』臨時増刊号「鷗外の断層撮影像」（昭58・11）に掲載されることになっている。このシンポジウムの引用が必要な場合、ゲラ刷りによって引用することにする。頁数を示す場合も同じくゲラ刷りによる。

◎『舞姫』における言葉の解釈の問題として、「前房」を取り上げた。三好行雄氏による解釈がよくわからないと言ったわけである。（二二四頁）この「前房」ということばについては、鷗外自身が書いている文章がある。「止くなつた原稿」（岩波版第三次全集第26巻所収）がそれである。

ノラの家に「前房」があると云ふことを私は書いた。評者はかう云ふ。前房とはなんの事だかわからない。ノルエイの家の戸口を這入ると、廊下のやうな處がある。そこに外套を脱いで掛けたり、杖を立て、置いたりして、さて室内に入るのである。それを知らずに、前房と云ふわからぬ語を書いたといふのであ

嘉 部 嘉 隆

る。（中略）評者の云ふやうな家の構造は（中略）ドイツの家だつてさうである。（中略）Vorstrubeと云つたつて、（中略）皆入口と室内との間にある廊下のやうな處である。（中略）評者は「玄關」と云へと云つてゐる。玄關とは禪寺か何から書院造の家に轉用せられた詞で、入口の事である。前房は玄關よりは内である。（略）

これで見ると「前房」にNebenzimmerは当たらないようである。◎山崎國紀氏は筆者の批判に反論を展開している。（二四三頁）

嘉部氏が、相沢謙吉は「前近代的爱愛観」を持った人物である、というふうに言っておられますが、私はそうは思わないのです。（中略）これは恋愛観までいってないと私は思うのです。

この引用は、あまりにも御都合主義である。拙稿は次のようになっている。（『森鷗外』昭55・9 桜楓社。71～72ページ）

相沢の恋愛観は恋愛観というよりは、むしろ非近代的な男女観、それも打算的な功利的な一面を持ったものと考えられる。『舞姫』において近代的恋愛観を否定する人物として描き上げた相沢謙吉（後略）

果して山崎氏の言うようなとらえ方になっているだろうか。作品も他者の論も正確に読み取ることが必要であろう。